

和語複合動詞と対応する漢語動詞の意味と自他

The meaning and intransitive-transitive usage of Sino-Japanese Verbs
corresponding to Japanese V-V compounds

張 志剛

要旨

本稿は、和語複合動詞へ展開できる VV 型漢語動詞を対象に、和語複合動詞を利用して VV 型漢語動詞の意味と自他をどのぐらいの精度で予測できるのかを検証した。結論として以下に纏められる。

- I 本稿の研究対象である和語複合動詞に展開できる VV 型漢語動詞は 212 語が得られた。
- II 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係について、和語複合動詞を利用して約 6 割 (62.3%) の確率で VV 型漢語動詞の意味を予測できる。
- III 和語複合動詞と VV 型漢語動詞における漢字の出現順序の異同は、和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係に影響を及ぼすことが分かった。
- IV 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用について、212 語を全体的に見ると、和語複合動詞を利用して約 8 割 (80.7%) の確率で VV 型漢語動詞の自他を推測できる。
- V 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係の違いは、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用に影響を及ぼすことが分かった。
- VI 和語複合動詞と VV 型漢語動詞における漢字の出現順序の異同も、和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用に影響を及ぼすことが分かった。

キーワード：和語複合動詞、VV 型漢語動詞、意味関係、自他使用、一致率

1 はじめに

日本語の動詞は主に漢語動詞と和語動詞に分けられる。漢語動詞は漢語サ変動詞とも称され、基本形として「漢語＋する」という形を取る。このような形式上の統一性は、漢語動詞の意味理解と自他の判断に複雑性をもたらし、日本語非母語話者にとって、習得しにくい点でもある。

漢語動詞の意味を理解するために、(1) のように漢語動詞の漢語の部分のを和語に訓じて、フレーズに展開する方法が考えられる。

- (1) a. 読書する→書を読む
- b. 激減する→激しく減る
- c. 採用する→採って用いる
- d. 打倒する→打って倒す

また(1d)の「打倒する」のように、「打って倒す」というフレーズに展開できるだけでなく、和訓に当たる和語複合動詞の「打ち倒す」も存在するので、和語複合動詞からもその意味を推測できる。「打倒する」と同じく、対応する和語複合動詞が存在する漢語動詞は、「成立する（成り立つ）、奮起する（奮い起こす）、投入する（投げ入れる）、消去する（消し去る／消え去る）」などが挙げられる。

しかし、「落着する－落ち着く、開始する－開き始める、寄付する－寄せ付ける」などのように、和語複合動詞が形式的に漢語動詞の和訓に相当するが、漢語動詞の意味と違うものも観察される。

また、(2)－(5)に示すように、漢語動詞と和語複合動詞の自他使用を考察すると、両者の自他が一致しない((4)(5)) ケースも存在する。

- (2) a. (自) 交渉が成立する
b. (自) 交渉が成り立つ
- (3) a. (他) 民衆が独裁政権を打倒する
b. (他) 民衆が独裁政権を打ち倒す
- (4) a. (自) 太郎が奮起する
b. (他) 太郎が勇気を奮い起こす
- (5) a. (他) 太郎がデータを消去する
b. (自) データが消え去る
c. (他) 太郎がデータを消し去る

このように、和語複合動詞を用いて、漢語動詞の意味と自他を推測することが可能であるが、推測不可能な例外がある点は否めない。例外があることも考慮した上で、どれくらいの確率で和語複合動詞から漢語動詞の意味と自他について推測できるのかを本稿では明らかにする。

2 考察対象及び先行研究の概観

2.1 考察対象

ここでは、本稿の考察対象である漢語動詞と和語複合動詞の範囲を具体的に定める。まず、問題を簡単にするため、本稿で扱う漢語動詞は漢語の部分が2つの漢字で構成される二字漢語動詞に限定し、和語複合動詞も前項動詞と後項動詞という2つの動詞から構成されるものに限定する。

訓読みして和語複合動詞に展開できる漢語動詞は、少なくとも和語複合動詞と同じ語構成を持つ必要がある。和語複合動詞が「打ち倒す、成り立つ」などのように動詞と動詞の組み合わせになるので、漢語動詞も漢語の部分が動詞性要素(V)と動詞性要素(V)で構成する二字漢語動詞（以下はVV型漢語動詞と称する）を考察対象とする。

また、(6)のように、和語複合動詞と漢字の出現順序が逆になっている VV 型漢語動詞も存在する。両者における漢字の出現順序が違っても、和語複合動詞から VV 型漢語動詞の意味を推測できるし、和語複合動詞を構成する動詞も漢語動詞の構成要素の訓に相当するので、「過食する、切断する」などのような VV 型漢語動詞をも考察対象とする。

- (6) a. 過食する－食べ過ぎる
- b. 切断する－断ち切る

一方、(7)に示すようなサ変動詞と和語複合動詞とのペアは、同じ漢字を持つ点においては以上に定めた考察対象と似ている。しかし、(7)を観察すると上記の考察対象と明らかに違うので、考察の対象外とする。具体的には、(7a)のサ変動詞は訓読みしかできないので、漢語動詞という条件を満たさない。(7b)の漢語動詞は動詞性要素 (V) と動詞性要素 (V) で構成する漢語動詞という条件を満たさない。「減食」は「食を減らす」なので動詞性要素と名詞性要素の組み合わせ、「直言」は「直に言う」なので副詞性要素と動詞性要素との組み合わせである。

- (7) a. 繰越する－繰り越す、届出する－届け出る、下見する－見下ろすなど
- b. 減食する－食べ減らす、直言する－言い直すなど

以上に定めた考察対象は、調査する際のデータ抽出の基準にもなる。

2.2 先行研究

2.1 では本稿における考察対象を定めたが、ここでは考察対象に関する先行研究を概観する。

まず、和語複合動詞に関する数多くの研究は大きく 3 種類に分けられる。1 つ目は寺村 (1984)、山本 (1984)、影山 (1993) などに代表される複合動詞の分類に関する研究、2 つ目は影山 (1993) と松本 (1998) などに代表される動詞の組み合わせにおける制約に関する研究、3 つ目は姫野 (1975、1977) のように特定の動詞を含む複合動詞の意味・用法に関する研究である。

一方、VV 型漢語動詞に関する単独の研究は少なく、ほとんどは日向 (1984)、野村 (1999) などのように漢語サ変動詞の語構成の研究の一部分として扱われる。小林 (2004) は VV 型漢語動詞 (小林 (2004) では VN・VN タイプ二字漢語動名詞と呼ばれる) を単独に扱う代表的な研究になるが、その焦点は主要部という観点から VV 型漢語動詞を分類することである。

また、本稿と同じように、和語複合動詞と VV 型漢語動詞を同時に扱う研究は、管見の限り石井 (1987) しか見当たらない。石井 (1987) では和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味・用法の関係によって 5 つのタイプに分けられている。本稿の目的は、対応する

和語複合動詞を利用して漢語動詞の意味と自他を推測できるかを検証することであり、この点で石井 (1987) と異なる。

先行研究をごく簡単に概観したが、本稿は和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味及び文法的関連性を探る点において一定の意義があると言えよう。

3 調査

3.1 データ資料

本稿で使用するデータ資料は次の 3 つである。

- I ヨミダス文書館¹から収集した読売新聞 2000 年の全国版一年分の記事データ (以下、「読売 2000」と称する)
- II 野村雅昭・石井正彦 (1987)『複合動詞資料集』 (以下、「複合動詞資料集」と称する)
- III 庭三郎『現代日本語文法概説』 (未公刊) のインターネット版²に揭示されている複合動詞の一覧表³ (以下、「複合動詞一覧表」と称する)

3 つのデータ資料の概要は次の通りである。

- I 「読売 2000」: 総記事数 133,883 個、総文字数 78,249,715 字⁴
- II 「複合動詞資料集」: 収録複合動詞総語数 7,429 語
- III 「複合動詞一覧表」: 収録和語複合動詞総語数 2,958 語

以下では、3 つのデータ資料に関する収集方法及び初期処理について簡単に述べる。

まず、「読売 2000」はヨミダス文書館の読売新聞データベースの検索機能を使って、2000 年の全国版の記事を抽出する (記事数が多いため、実際に作業する際、月別に記事を抽出した)。抽出した記事は一つずつ一旦表示されたウェブページのソースをテキストファイルに保存する。そしてソースに記載されているタグの情報を利用し、perl プログラムを用いて機械的に記事のタイトル、掲載年月日、紙誌名 (例えば: 東京朝刊、東京夕刊など)、面名、記事本文を取得し、新たなテキストファイルに保存する。最後にすべてのテキストファイルを一つに結合して初期処理が完了する。また、動詞の自他使用を確認するため、得られた「読売 2000」のデータを、国立国語研究所が公開している全文検索システム『ひまわり』で検索できるように加工し、「読売 2000 コーパス」として用いる。

¹ <http://www.yomiuri.co.jp/bunshokan/>

² <http://www.geocities.jp/niwasaburoo/index.html>

³ <http://www.geocities.jp/niwasaburoo/04fukugoudousi.html>

⁴ テキストエディターである「秀丸エディタ」の文字数カウントマクロの修正版

MultiCount.mac (<http://homepage2.nifty.com/12sun/sansui.html>) を利用し数えた結果である。具体的には、全角文字と半角文字は 1 文字として数え、スペース、改行記号、タブは数えないように設定した。

次に、「複合動詞資料集」は『複合動詞資料集』に収録されている複合動詞をデジタル化して、複合動詞のリストを作成し第一次資料とする。第一次資料として 7,429 語の複合動詞が得られたが、中には「愛読し続ける、安心し切る、うっとりし掛ける、埋められ始める」などのような和語複合動詞と言えないものが 778 語、「追い駆け合う、繰り返す続ける、見付け出す」などのような二つ以上の動詞から構成されるものが 317 語、「言いこなす、うねり曲がる、ひねこびる」などのような前項動詞または後項動詞が仮名表記だけを用いるものが 214 語、「掻っ切る（掻き切る）、突っ込む（突き込む）」などのような複合動詞の音変化で語形が異なるものが 67 語含まれている。これらを除いて、本稿の考察対象に適合する 6,053 語の和語複合動詞が得られた。

最後に、「複合動詞一覧表」は「複合動詞資料集」の補足として用いる。「複合動詞一覧表」では、2 つの動詞で構成する複合動詞しか掲載されておらず、その上アスペクト用法の後項動詞を取り上げていないので、語数から見れば「複合動詞資料集」の半分以下で 2,958 語しかない。「複合動詞資料集」から得られた 6,053 語の和語複合動詞と照合して、両者に共通するものが 1,976 語、「複合動詞一覧表」にしかないものが 982 語である。982 語から仮名表記になる 56 語と音変化である 23 語を除いた 903 語を追加し、本稿で扱う和語複合動詞のリスト（6,956 語）を作成した。

3.2 調査の流れ

3.2.1 二字漢語動詞の抽出

「読売 2000」におけるすべての二字漢語動詞を次の方法で抽出する。形態素解析ソフト「茶筌」を用いて、「読売 2000」を形態素解析する。漢語動詞を抽出することが目的なので、形態素解析の結果から漢字の「未知語」を抽出し、原文と照合しながら手動で修正し、漢字語の解析精度を高める。修正後の解析結果から漢語の後ろに「する、させる、される、できる」及びその活用形がくる二字漢語動詞を、perl プログラムで機械的に抽出する。結果として、異なり語数で 4,427 語の二字漢語動詞を得られた。

3.2.2 ペアになる二字漢語動詞と和語複合動詞の抽出

まず、3.1 で作成した和語複合動詞リスト（6,956 語）を利用して、個々の和語複合動詞の語根に当たる漢字を、前後の順序を保ったまま抽出する。例えば、「打ち倒す」からは「打倒」を抽出する。

次に、4,427 語の二字漢語動詞の漢字語幹と 1 つずつ照合して、同じ漢字で構成する二字漢語動詞と和語複合動詞のペアを抽出する。この段階での抽出結果には、「打倒するー打ち倒す」のようなペアだけではなく、(7) に示した「繰越するー繰り越す、減食するー食べ減らす」なども含まれている。そのため、ここで得られた二字漢語動詞と和語複合動詞のペアを第一次データとする。

3.2.3 ネイティブチェック

抽出した第一次データを、日本語学を専攻する日本人の大学院生3人に以下の3つの項目についてネイティブチェックしてもらった。

- I VV型二字漢語動詞であるか（○と×で答える）
- II 二字漢語動詞と和語複合動詞との意味が完全に違うか（○と×で答える）
- III 二字漢語動詞と和語複合動詞の自他（自動詞か他動詞か自他両用動詞かを記入）

ネイティブチェックの結果は、基本的に3人が一致する場合、それに従うが、一致しない場合、3人に相談した上で決めてもらう。また、動詞の自他という問題は難しい問題であり、3人の判断結果以外に、「読売2000コーパス」に現れた事例も参考に、最終的に判断してもらった。

3.3 調査の結果

以上のデータ資料と調査に基づき、和語複合動詞に展開できるVV型漢語動詞として212語が得られた。

まず、VV型漢語動詞と和語複合動詞との意味関係を集計した結果、両者の意味が完全に異なるものが80語、両者の意味が共通する部分を持つものが132語である。全体的に見れば、約6割（62.3%）の確率で和語複合動詞からVV型漢語動詞の意味を推測できるという結果になる。

次に、VV型漢語動詞と和語複合動詞との意味が共通する部分を持つ132語の自他使用を集計した結果、両者の自他使用が一致する語数が119語、一致しない語数が13語である。和語複合動詞の自他から約9割（90.2%）の確率でVV型漢語動詞の自他を推測できるという結果になる。一方、VV型漢語動詞と和語複合動詞との意味が異なる80語の自他使用を集計した結果、両者の自他使用が一致する語数が52語、一致しない語数が28語である。和語複合動詞の自他から約7割（65.0%）の確率でVV型漢語動詞の自他を推測できるという結果になる。また、全体的に約8割（80.7%）の確率で和語複合動詞を利用してVV型漢語動詞の自他を推測できると言える。

詳細な調査結果は次に示す。

4 分析

ここでは、VV型漢語動詞と和語複合動詞における漢字の出現順序の異同により、(8)のように3つのパターンに分けた上で、3.3節の調査結果をより詳しく分析する。

(8) VV型漢語動詞と和語複合動詞における漢字出現順序のパターン

- a. パターン1：漢字順序一致型（152語） 例：成立する－成り立つ
- b. パターン2：漢字順序逆転型（52語） 例：切断する－断ち切る
- c. パターン3：漢字順序自由型（8語） 例：並立する－並び立つ／立ち並ぶ

4.1 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係

3.3節では和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味の一致率は全体的に 6 割程度 (62.3%) であると述べたが、本節では (8) に示す三つのパターンに分けて、それぞれにおける意味の一致率を算出した。結果は表 1 の通りである。

表 1 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係

	意味が違う語数	意味が共通する語数	合計	意味の一致率
パターン 1	51	101	152	66.4%
パターン 2	22	30	52	57.7%
パターン 3	7	1	8	12.5%

表 1 を見ると、和語複合動詞の意味から VV 型漢語動詞の意味を推測できる確率は、パターン 1 の漢字順序一致型が最も高く 7 割弱に達しているが、パターン 3 の漢字順序自由型が 1 割程度にとどまるという結果になっている。

4.2 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用

ここでは、和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用をより詳しく見るため、和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係を考慮して、(9) に示すような分類によって調査結果の再集計を行った上で分析を行う。

(9) タイプ A：和語複合動詞と VV 型漢語動詞が共通する意味を持つ場合 (132 語)

タイプ A1：漢字順序一致型 (101 語)

タイプ A2：漢字順序逆転型 (30 語)

タイプ A3：漢字順序自由型 (1 語)

タイプ B：和語複合動詞と VV 型漢語動詞が共通する意味を持たない場合 (80 語)

タイプ B1：漢字順序一致型 (51 語)

タイプ B2：漢字順序逆転型 (22 語)

タイプ B3：漢字順序自由型 (7 語)

さらに、各タイプに属する語について、和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用に基づき、両方とも他動詞、両方とも自動詞、両方とも自他両用動詞、両方の自他使用にずれがあるもの、という 4 つのグループに分けてそれぞれリストアップする。次に、和語複合動詞が他動詞、自動詞、自他両用動詞である場合、VV 型漢語動詞との自他使用の一致率をそれぞれ算出する。

4.2.1 タイプ A：共通の意味を持つ和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用

4.2.1.1 タイプ A1：漢字順序一致型

タイプ A1 に属するものは 101 語ある。具体的に、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致する場合、両方とも他動詞が 57 語、両方とも自動詞が 35 語、両方とも自他両用動詞が 1 語である。

タイプ A1 において VV 型漢語動詞と和語複合動詞との自他使用が一致する場合、両方とも他動詞になるものが 57 語で最も多く、タイプ A1 (101 語) 全体の 6 割弱 (56.4%) を占めている。その次は両方とも自動詞になるものが 35 語でタイプ A1 全体の 3 割強 (34.7%) まで減少している。最後は両方とも自他両用動詞になるものが 1 語しかなく最も少ない。

また VV 型漢語動詞の構成要素を観察すると、次のような特徴が見られた。まず、他動詞になる場合、VV 型漢語動詞の後項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものは「出 (6 回)、入 (5 回)、殺 (4 回)、合 (3 回)、育 (2 回)、求 (2 回)、取 (2 回)、置 (2 回)、破 (2 回)、放 (2 回)、明 (2 回)、与 (2 回)」計 12 字 34 回で、全体の 57 語の 6 割 (59.6%) も占めている。一方、前項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものは「移 (2 回)、解 (2 回)、推 (2 回)、選 (2 回)、送 (2 回)、打 (2 回)、追 (2 回)、投 (2 回)」計 8 字 16 回で、全体の 57 語の 3 割弱 (28.1%) を占めている。後項要素の漢字が前項要素の漢字より重複して用いられやすい傾向は明らかである。前項要素の漢字は最大で 2 回出現したが、後項要素の漢字は「出 (6 回)、入 (5 回)」のように高い頻度で用いられる。

次に自動詞になる場合、後項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものは「死 (3 回)、出 (3 回)、入 (3 回)、落 (3 回)、失 (2 回)」計 5 字 14 回で、全体の 35 語の 4 割 (40.0%) を占めている。一方、前項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものは「移 (2 回)、滑 (2 回)、突 (2 回)、飛 (2 回)」計 4 字 8 回で、全体の 35 語の 2 割強 (22.9%) を占めている。他動詞の場合と同じように、後項要素の漢字が前項要素の漢字より重複して用いられやすい傾向であるが、後項要素の漢字でも前項要素の漢字でも重複して用いられる割合はだいぶ少なくなっている。また、後項要素としての「出、入」は他動詞の場合と自動詞の場合のいずれにおいても、出現回数が高いことは特徴的である。

さらに和語複合動詞を観察すると、和語複合動詞の後項動詞の自他は和語複合動詞の自他と一致することが分かる。他動詞の場合には和語複合動詞の後項動詞が他動詞に、自動詞の場合には和語複合動詞の後項動詞が自動詞になっている。

続いて、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致しない場合、表 2 に示すように 4 つのパターンが存在し、合計 8 語になる。

表 2 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用のずれのパターン (タイプ A1)

パターン	VV 型漢語動詞	和語複合動詞	語数	対象動詞
1	他動詞	自他両用	2	消去－消え去る/消し去る、 付加－付け加わる/付け加える
2	自動詞	他動詞	2	奮起－奮い起こす、 恋慕－恋い慕う
3	自他両用	他動詞	2	貫通－貫き通す、 結合－結び合わせる
4	自他両用	自動詞	2	焼失－焼け失せる、 現出－現われ出る
小計			8	

以上の結果を利用して、和語複合動詞が他動詞、自動詞、自他両用動詞である場合、VV 型漢語動詞との自他使用の一致率は表 3 に纏められる。

表 3 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率 (タイプ A1) (単位: 語)

	他動詞		自動詞		自他両用動詞		合計	
和語複合動詞	61	60%	37	37%	3	3%	101	100%
自他一致の語数と一致率	57	93%	35	95%	1	33%	93	92%

表 3 の一致率を見ると、タイプ A1 に属する和語複合動詞は自他両用動詞になる以外に、いずれも 9 割超の確率で VV 型漢語動詞の自他を推測できることが分かる。また、表 2 を観察すると、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用にずれが生じるものでは、完全に推測不可能になるのはパターン 2 の「奮起－奮い起こす」のような「自動詞－他動詞」のずれだけである。要するに、「自動詞－自他両用」と「他動詞－自他両用」のようなずれが生じる場合、和語複合動詞の自他から VV 型漢語動詞の自他を推測すれば半分正しい結果になる。

4.2.1.2 タイプ A2: 漢字順序逆転型

タイプ A2 に属するものは 30 語あり、タイプ A1 の漢字順序一致型の 101 語と比べ、7 割も少なくなっている。

具体的に和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致する場合、両方とも他動詞が 16 語、両方とも自動詞が 8 語、両方とも自他両用動詞が 1 語である。

タイプ A2 において VV 型漢語動詞と和語複合動詞との自他使用が一致する場合、両方とも他動詞になるものが 16 語で最も多く、タイプ A2 (30 語) 全体の 5 割強 (53.3%) を占めている。その次は両方とも自動詞になるものが 8 語でタイプ A2 (30 語) 全体の 3 割弱 (26.7%) と少ない。最後は両方とも自他両用動詞になるものが 1 語しかなく最も少ない。このように自他別に語の分布状況を見ると、タイプ A2 はタイプ A1 との差が見られなかった。

また VV 型漢語動詞の構成要素を観察すると、次のような特徴が見られた。まず、他動詞になる場合は、VV 型漢語動詞の後項要素になる漢字が 2 回以上用いられるものは「言 (3 回)、読 (3 回)、送 (2 回)、問 (2 回)」計 4 字 10 回で、表 7 の 16 語の 6 割 (62.5%) も占めている一方、前項要素になる漢字が 2 回以上用いられるものはなかった。タイプ A1 と同じように、後項要素の漢字が前項要素の漢字より重複して用いられやすい傾向は見られたが、後項要素として重複して用いる漢字はタイプ A1 のそれと 1 つも重ならなかったことも特徴的である。

次に自動詞になる場合は、語数が少ないことが原因かもしれないが、後項要素になる漢字が 2 回以上用いられるものはなく、前項要素になる漢字が 2 回以上用いられるものは「出 (2 回)」計 1 字 2 回である。

続いて、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致しない場合、表 4 に示すように 3 つのパターンが存在し、合計 5 語になる。

表 4 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用のずれのパターン (タイプ A2)

パターン	VV 型漢語動詞	和語複合動詞	語数	対象動詞
1	自動詞	自他両用	2	曲折－折れ曲がる/折り曲げる、 動揺－揺れ動く/揺り動かす
2	自動詞	他動詞	2	過食－食べ過ぎる、 破裂－裂き破る
3	自他両用	他動詞	1	分解－解き分ける
小計			5	

以上の結果を利用して、和語複合動詞が他動詞、自動詞、自他両用動詞である場合、VV 型漢語動詞との自他使用の一致率は表 5 に纏められる。

表 5 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率 (タイプ A2) (単位: 語)

	他動詞		自動詞		自他両用動詞		合計	
和語複合動詞	19	63%	8	27%	3	10%	30	100%
自他一致の語数と一致率	16	84%	8	100%	1	33%	25	83%

表 5 の一致率を見ると、タイプ A2 に属する和語複合動詞は自動詞になる場合が 100% の一致率に達しているが、全体的に和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率を見ると、漢字順序逆転型のタイプ A2 (83%) が漢字順序一致型のタイプ A1 (92%) より一致率が 1 割弱低くなっている。

4.2.1.3 タイプ A3: 漢字順序自由型

このタイプには「並立－並び立つ/立ち並ぶ」の 1 語しかなく、しかも和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他が自他両用動詞で一致する。

4.2.1.4 まとめ

以上をまとめると、タイプ A に属する 132 語の和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用の一致率は表 6 の通りである。

表 6 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率（タイプ A）（単位：語）

	他動詞		自動詞		自他両用動詞		合計	
和語複合動詞	80	61%	45	34%	7	5%	132	100%
自他一致の語数と一致率	73	91%	43	96%	3	43%	119	90%

表 6 に示すように、和語複合動詞と VV 型漢語動詞が共通する意味を持つ場合、和語複合動詞の自他を利用して VV 型漢語動詞の自他を正しく予測する確率が 9 割である。

4.2.2 タイプ B：共通の意味を持たない和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用

4.2.2.1 タイプ B1：漢字順序一致型

まず、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致する場合、両方とも他動詞が 16 語、両方とも自動詞が 17 語、両方とも自他両用動詞が 2 語である。

タイプ B1 における自他別の語の分布状況を見ると、他動詞に属するもの（16 語）と自動詞に属するもの（17 語）は語数がほぼ同じであり、タイプ A1 のそれ（57 語対 35 語）と明らかに異なることが分かる。このことから、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の意味関係の違いが自他別の語の分布に影響を及ぼしていると言える。

また VV 型漢語動詞の構成要素を観察すると、次のような特徴が見られた。まず、他動詞になる場合、VV 型漢語動詞の後項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものは「得（3 回）、出（2 回）、破（2 回）」計 3 字 7 回で、全体の 16 語の 4 割（43.8%）を占めている。一方、前項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものはなかった。

次に自動詞になる場合、後項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものは「出（3 回）、下（2 回）、行（2 回）、合（2 回）、着（2 回）」計 5 字 11 回で、全体の 17 語の 6 割（64.7%）を占めている。一方、前項要素になる漢字で 2 回以上用いられるものは「流（3 回）、転（2 回）」計 2 字 5 回で、全体の 17 語の 3 割弱（29.4%）を占めている。

以上の結果を見ると、タイプ B1 に属する VV 型漢語動詞は、タイプ A1 と同じように、後項要素の漢字が前項要素の漢字より重複して用いられやすい傾向が見られた。

続いて、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致しない場合、表 7 に示すように 6 つのパターンが存在し、合計 16 語になる。タイプ A と比べて、自他使用にずれが生じる語数が大幅に増えただけではなく、考えられるすべてのずれのパターンにも分布しているのが特徴的である。

表 7 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用のずれのパターン (タイプ B1)

パターン	VV 型漢語動詞	和語複合動詞	語数	対象動詞
1	他動詞	自他両用	2	振起－振り起こす/振り起きる、 抱合－抱き合わせる/抱き合う
2	他動詞	自動詞	2	会得－会い得る、 添加－添い加わる/添い加える
3	自他両用	他動詞	2	持続－持ち続ける、 編入－編み入れる
4	自他両用	自動詞	3	進行－進み行く、 倒伏－倒れ伏す、 転回－転げ回る
5	自動詞	他動詞	3	振動－振り動かす、 断続－断ち続ける、 降下－降り下ろす
6	自動詞	自他両用	4	流出－流れ出る/流し出す、 垂下－垂れ下げる/垂れ下がる、 脱落－脱げ落ちる/脱ぎ落とす、 突入－突き入れる/突き入る
小計			16	

以上の結果を利用して、和語複合動詞が他動詞、自動詞、自他両用動詞である場合、VV 型漢語動詞との自他使用の一致率は表 8 に纏められる。

表 8 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率 (タイプ B1) (単位: 語)

	他動詞		自動詞		自他両用動詞		合計	
和語複合動詞	21	41%	22	43%	8	16%	51	100%
自他一致の語数と一致率	16	76%	17	77%	2	25%	35	69%

表 8 の一致率を見ると、いずれの項目も同じ漢字順序一致型であるタイプ A1 の一致率 (表 3) より低くなっている。最も一致率が高い自動詞になる場合でも 8 割に達していない。このことから、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の意味関係の違いが、ある程度両者の自他使用の関係に影響を及ぼしていると言えよう。

4.2.2.2 タイプ B2: 漢字順序逆転型

タイプ B2 に属するものは 13 語あり、タイプ B1 の漢字順序一致型の 35 語と比べ、6 割も少なくなっている。

具体的に和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致する場合、両方とも他動詞が 7 語、両方とも自動詞が 6 語、両方とも自他両用動詞が 0 語である。

タイプ B2 における自他別の語の分布状況を見ると、他動詞に属するもの (7 語) と自動詞に属するもの (6 語) は語数もほぼ同じであり、タイプ B1 のそれ (16 語対 17 語) と同じ傾向にあり、タイプ A2 のそれ (16 語対 8 語) と明らかに異なることが分かる。

また、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用が一致しない場合、表 9 に示すように 3 つのパターンが存在し、合計 9 語になる。

表 9 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用のずれのパターン (タイプ B2)

パターン	VV 型漢語動詞	和語複合動詞	語数	対象動詞
1	他動詞	自動詞	4	回転－転げ回る、 合成－成り合う、 添付－付き添う、 返納－納まり返る
2	自動詞	他動詞	4	下降－降り下ろす、 屈折－折り屈める、 交差－差し交わす、 付着－着付ける
3	自動詞	自他両用	1	合流－流れ合う/流し合わせる
小計			9	

以上の結果を利用して、和語複合動詞が他動詞、自動詞、自他両用動詞である場合、VV 型漢語動詞との自他使用の一致率は表 10 に纏められる。

表 10 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率 (タイプ B2) (単位：語)

	他動詞		自動詞		自他両用動詞		合計	
和語複合動詞	11	50%	10	45%	1	5%	22	100%
自他一致の語数と一致率	7	64%	6	60%	0	0%	13	59%

表 10 の一致率を見ると、いずれの項目もタイプ B1 (表 8) より低くなっていて、6 割前後に止まっている。また、タイプ B2 全体の一致率 (59%) がタイプ A2 全体の一致率 (83%) より 2 割強も減っている。

4.2.2.3 タイプ B3：漢字順序自由型

最後はタイプ B3 に属する 7 語を見る。タイプ A3 の場合は 1 語しかないのに対して、同じ意味を持つという制限を加えないと、タイプ B3 の語数が 7 倍までも増えた。具体的に、VV 型漢語動詞と和語複合動詞とも自動詞になるものが 4 語、VV 型漢語動詞と和語複合動詞の自他が異なるものが 3 語存在する。

タイプ B3 に属する 7 語は、VV 型漢語動詞と和語複合動詞の自他使用による分布を見ると、自他使用が一致する場合は自動詞になるものしか存在しないことが特徴的である。次の表 11 に示したタイプ B3 の一致率を見ても、自動詞の場合が 8 割にも達し、タイプ B3 全体の一致率 (57%) を上回っている。

表 11 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率 (タイプ B3) (単位：語)

	自動詞		自他両用動詞		合計	
和語複合動詞	5	71%	2	29%	7	100%
自他一致の語数と一致率	4	80%	0	0%	4	57%

4.2.2.4 まとめ

以上をまとめると、タイプ B に属する 80 語の和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用の一致率は表 12 の通りである。

表 12 和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率 (タイプ B) (単位: 語)

	他動詞		自動詞		自他両用動詞		合計	
和語複合動詞	32	40%	37	46%	11	14%	80	100%
自他一致の語数と一致率	23	72%	27	73%	2	18%	52	65%

表 12 に示すように、和語複合動詞と VV 型漢語動詞が共通する意味を持たない場合、和語複合動詞の自他を利用して VV 型漢語動詞の自他を正しく予測する確率が 65% である。

5 おわりに

本稿は、和語複合動詞へ展開できる VV 型漢語動詞を対象に、和語複合動詞を利用して VV 型漢語動詞の意味と自他をどのぐらいの精度で予測できるのかを検証した。結論として以下に纏められる。

- I 本稿の研究対象である和語複合動詞に展開できる VV 型漢語動詞は 212 語が得られた。
- II 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係について、両者の意味が完全に異なるものが 80 語、両者の意味が共通する部分を持つものが 132 語であることが分かった。和語複合動詞を利用して約 6 割 (62.3%) の確率で VV 型漢語動詞の意味を予測できる。
- III 和語複合動詞と VV 型漢語動詞における漢字の出現順序の異同は、和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係に影響を及ぼすことが分かった。具体的に、漢字順序一致型、漢字順序逆転型、漢字順序自由型における和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味の一致率はそれぞれ 66.4%、57.7%、12.5% である。
- IV 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用について、212 語を全体的に見ると、和語複合動詞を利用して約 8 割 (80.7%) の確率で VV 型漢語動詞の自他を推測できる。
- V 和語複合動詞と VV 型漢語動詞との意味関係の違いは、和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用に影響を及ぼすことが分かった。具体的に、タイプ A (和語複合動詞と VV 型漢語動詞が共通する意味を持つ場合) とタイプ B (和語複合動詞と VV 型漢語動詞が共通する意味を持たない場合) における和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率がそれぞれ 90% と 65% で、両者の間に大差が観察された。
- VI 和語複合動詞と VV 型漢語動詞における漢字の出現順序の異同も、和語複合動詞と VV 型漢語動詞との自他使用に影響を及ぼすことが分かった。具体的に、タイプ A1 (漢字順序一致型) とタイプ A2 (漢字順序逆転型) における和語複合動詞と VV 型

漢語動詞の自他使用の一致率がそれぞれ 92%と 83%で、タイプ B1（漢字順序一致型）とタイプ B2（漢字順序逆転型）における和語複合動詞と VV 型漢語動詞の自他使用の一致率がそれぞれ 69%と 59%で、一割程度の差が観察された。

参考文献

- 石井正彦（1987）漢語サ変動詞と複合動詞、『日本語学』6・2、pp.46-59
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』、ひつじ書房
- 小林英樹（2004）『現代日本語の漢語動名詞の研究』、ひつじ書房
- 寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版
- 野村雅昭（1999）サ変動詞の構造、森田良行教授古稀記念論文集刊行会（編）、『日本語研究と日本語教育』、明治書院、pp.1-23
- 野村雅昭・石井正彦（1987）『複合動詞資料集』、国立国語研究所
- 日向敏彦（1984）漢語サ変動詞の構造、上智大学国文学会（編）、『国文学論集』18、pp.161-179
- 姫野昌子（1975）複合動詞『～つく』と『～つける』、『日本語学校論集』2、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、pp.52-71
- 姫野昌子（1977）複合動詞『～でる』と『～だす』、『日本語学校論集』4、東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、pp.71-95
- 姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』、ひつじ書房
- 松本曜（1998）日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ、『言語研究』114、pp.37-83
- 山本清隆（1984）複合動詞の格支配、『都大論究』21、東京都立大学、pp.32-49

（ちょう しこう 中国・広東外語外貿大学 言語社会研究科博士課程修了生）